

林文子先生を偲んで

## 林文子博士をしのぶ

玉木 正男

林文子博士の御逝去、誠に悲しいことである。

名古屋大学を定年退職前後から健康文化振興財団を理事長として主宰され、これから尚一層の御活躍を我々は期待していたのであるが、不幸にも病魔のおかすところとなり、お別れせねばならないことになった。本当に惜しい、さびしいことである。

医学、医療に関係してもっとも永くおつきあい願ったものの一人として、特に岐阜時代から長崎時代にわたる昔の思い出を申しのべ、故人をしのびたいと思う。

筆者が昭和25年岐阜県立医大に赴任し放射線科教授として一年間の講義の後卒業試験を行なった最初のクラスの学生が林君であった。岐阜医大放射線科では心血管造影の研究に着手し、林君は文字通りその先駆者の一人であった。変形しつつ急速に動く人体心臓内腔のレントゲン写真を、日本で最初に撮影し各方面の注目をひいたのであるが、スウェーデン、米国などより十数年遅れての苦難の道であった。毎秒6枚二方向同時撮影可能なスウェーデン製装置を日本最初に設置する長崎大学に転じたのが昭和32年であるが、関連した研究に既に着手していた林君が長崎へ移ったのはたしかその翌年であった。血行路用ヨード含有高濃度造影剤注射の影響に関する病理組織学的研究が林君の学位論文となり、日本医学放射線学会雑誌昭和34年12月号に掲載されている。心血管造影剤の影響を血圧、心電図、脈波曲線などで追求した研究は無数にあるが、病理学的研究は貴重で「新しい薬理学だ」とは薬理学教授のコメントであった。

長崎で林博士は、浦上天主堂のごく近くに住み、学位を得てから後も長崎原爆病院放射線科で被爆者の診療に力をつくされたのは、博士の信仰を一層深めたように思う。

謹んで御冥福をお祈りする。

(大阪市立大学名誉教授)